

# 日本説話索引 全七卷

説話と説話文学の会編 ◆ 第三卷 こうふうしゆ

好評配本中 清文堂



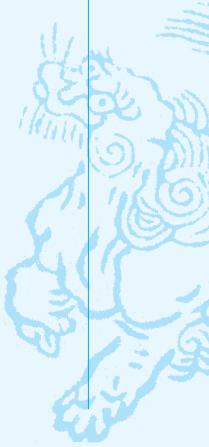
いざ、説話の森に!

40万の説話の概要が『読める』索引、待望の刊行

清文堂



## 刊行にあたって



『日本説話索引』が、ようやく刊行されることになった。手元の記録によれば、出版準備が始まったのは昭和五十五年（一九八〇）。それから実に四十年が経過している。

当初四年後に予定されていた刊行がここまで延引したのは、採録と編集を依頼されたメンバーが、いささか過剰なほど大きな意欲を持ち、対象作品を最大限まで増やしたところによるところが大きい。採録対象の作品は、おおよそ室町時代を下限とする総計百六十七点。原則として翻刻されたものを対象にしたが、注釈のないものも多く、計画するのは簡単だったが、実際に取り組んでみると予想を超えて膨大な時間が必要だったのである。

多くの人々にさまざまな形で助けられながら、採録は粘り強く続けられた。専用のカードに要旨などを手書きで書き入れるという、現在からは考えられない素朴な方法で集められた原稿カードは、五十音順に整理され、専用のケースに入れられて保存、整理されながら少しずつその数を増やし、最終的には専用ケース百七十箱にまで至った。

その後、若い世代にも新しくメンバーに加わってもらい、採録もパソコンを使って行われるようになり、集積した原稿もデータ化されて、ようやく採録は最終段階に近づいていった。最終的に採録されたカード数（説話要旨の総計）は、四十万項を超えている。

データの量が膨大で、また作業が長期間に及んだため、方針変更

の徹底や全体にわたる点検などは、力を尽くしたにもかかわらず、完璧に行うことが困難であった。さまざまな問題点がなお残されていることも予想されるが、どうかご容赦の上、今後の改訂のために情報をお寄せいただきたい。

この『日本説話索引』は、「説話」の概念を広く捉え、さまざまな性格の「説話」をできるだけ多く採録したところに特徴を有する。また、単にその語の所在を示す索引ではなく、その「説話」の要旨を掲載して、「読める索引」を目指している。長い時間をかけてようやく完成した本書が、多くの人々に利用され、さまざまな形でお役に立つことを、编者一同、心より願うものである。

最後に、これまでご助力いただいた多くの皆様に、そして、四十年間この企画を見捨てることなく、常に我々を支え続けてくださった清文堂出版前田博雄氏に、心より御礼申し上げます。とりわけ、同社の担当として長らくご尽力いただきながら刊行を見ることがなく他界された故前田保雄氏に心からの謝意を表するとともに、すでに世を去った編集委員・故田村憲治氏および故芳賀紀雄氏にも今回の刊行を報告して、ご冥福をお祈りするものである。

二〇二〇年四月

説話と説話文学の会

池田敬子 出雲路修 田村憲治 芳賀紀雄 森真理子 山本登朗  
朝比奈英夫 柴田芳成 白井伊津子 中嶋容子 橋本正俊 森田貴之

〔第一巻より〕

# 豊かな言説の世界

## ——新たな活用法を求めて

乾 善彦 関西大学文学部 教授

もう二十年以上も前になる。『萬葉』の編輯長を拝命し、印刷を引き受けてもらっていた清文堂を訪ねたときのこと、二階の作業場のようなところにうずたかく積まれたゲラの山。それは『日本説話索引』のものであった。『説話文学索引』が、当時奉職していた大阪女子大学の前身、女専時代にその発端があり、その改訂版が企画されていることは、複数の関係者から聞いていたが、そしてそれはほぼ完成の域にあることを知らされていたが、そのゲラを見て、確かに完成間近という印象を受けた。しかし、刊行が始まったのは、それから二十年を経てからのこと。

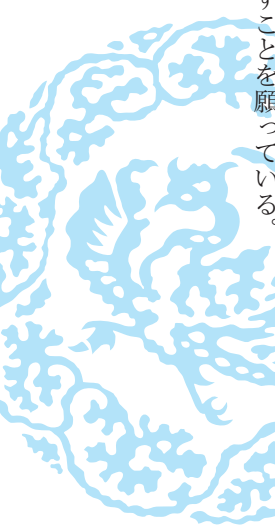
この企画がはじまったころ、文学史研究の興味は注釈世界の言説にあったように思う。あらたに参照された資料の多くは、そのような注釈である。なので、従来の説話世界よりも広い範囲の古典に対する言説が集められている。たとえば、顕昭の『古今集序注』や『伊勢物語』の冷泉家流の注、あるいは『源氏物語』の『河海抄』などである。これらには、やはり説話というべき言説がみとめられる。これらによってわれわれは、古典を読んだいにしへ人の感覚にふれることになる。それは教科書的な、あるいは百科事典的な記述からはみだした世界かもしれない。

近年、授業で基礎語彙の語誌をとりあげることが多く、卒業論

文にも、語誌をとりあげる学生も多い。その時、それぞれの時代の語性を調査することを求めるのだが、それにはまずは説話索引にあたるのが有効であると指示している。通常の辞書やネット検索（今はほとんどの古典作品はネットで検索可能）では検索できない意味用法のまとまりに出会うことがあるからである。

そもそも、辞書や索引といった工具書には、辞書的な情報や用例のありかを検索するだけでなく、意外な利用方法がありうる。『古典対照語彙』などはその好例であるが、今、こころみに人名や地名、あるいは書名といった固有名詞を引いてみられたい。それぞれの逸話が、どの書にどれくらい出現するかは、その享受された範囲を示すことになる。たとえば、『古事記』などはわずかに四書六例にすぎない。これが、『日本紀』（日本記、日本書紀）になるとおそらくは数頁に及ぶであろう。そこに両書の長年にわたる享受の差が浮かび上がってくるのである。このような利用法の工夫が研究の進展、あらたな発見につながるものが往々にしてあるのではないか。「読める索引」ならではの活用法であろう。

大阪女専の一室で説話文学研究のためのカード取りからはじまったこの索引のあらたな出発がそこにはある。本年、大阪女専から大阪女子大学、大阪府立大学と引き継がれてきた学燈が、大阪公立大学として新たに出版を迎えた。この年に、三回目配本を迎える『日本説話索引』が、新たな利用法の発見によって、ますます輝きを増すことを願っている。



# 『日本説話文学索引』から 『日本説話索引』へ

源 健一郎 同志社大学 教授

修士課程に進んでしばらくの頃、指導教授の研究室で、「こんなに便利な索引があるのでしょ」と差し出された一冊の本があった。手のひらサイズのその本こそが『増補改訂 日本説話文学索引 縮刷版』であった。実際にページを繰ってみると、体裁への違和感が先立った。一般的な索引は、横書きのレイアウトに、見出し語とページ等の数字が延々と並ぶ無機質なページ構成である。その索引は縦書きで、見出し語に続いて、その語を巡る物語的説明が簡潔に施されていた。

実際に「読んで」みると、この体裁こそが便利さの所以であると気付かされた。見出し語がどのような文脈で現れるかが確認できるのである。語の使用例に対する網羅性という観点からは、一般的な索引類に分があるとは言えようが、その反面、そうした索引類を用いてみると「空振り」の確率も低くない。語の存在自体に行き当たったとしても、自分の興味関心に適う用例を見いだすことは難しいからである。その点、この索引に施された要旨は、調べものをする上での格好のガイドとなる。

しかも、作品ごとに刊行される一般的な索引と異なり、この索引では一度に複数の作品の用例を一覧することができる。それらを「読む」ことで、問題意識はさらに展開していく。それらを比

較検討すれば、時代やジャンルによる位相差について考える端緒にもなる。他の索引では検索が難しい概念的な用語が見出しに取られていることも、活用の幅を広げていた。

その有用性に気づかされて以来、いかにインターネット上のデータベース類が充実しようとも、私の調べものに『日本説話文学索引』は欠かせないツールであり続けた。この索引は、私がそうであったように、ぜひ学生たちに勧めなければならぬ。大学教員となった私は、そうした使命感にも似た思いを抱くようになったのだが、実際には困難があった。第一に底本が古いこと、第二に現在の研究状況からすれば検索対象のテキストが限られていることである。もどかしい思いであった。

ただ、そうした思いは、私のみならず、はやく昭和期末から研究者有志の方々に共有されてきたことが、二〇二〇年に至って知られることとなった。「読める」索引としての性格を引き継ぎつつ、質量ともに格段に充実した『日本説話索引』の刊行によってである。編集に関わったみなさん、出版社には心より敬意を表したい。判型が大きくなって一覧性が向上したことは、デジタルデバイスにはない強みでもある。全七巻の完結を心待ちにしながら、日本文学研究を志す学生の皆さんとともに、この貴重な成果を活用していきたい。



# 編集委員より

## 出雲路 修

本索引の「説話要旨」という小さい窓ひとつひとつの向こうには広大な世界がある。正史の「欠史」の空隙を補綴する「稗史」の世界である。

『日本書紀』には詳細記事を欠く綏靖天皇以降のいわゆる「欠史八代」の時代にも、さまざまな事件があった。

安寧天皇の時代には天叢雲剣がいつとき所在不明になったが布留川で発見され、孝昭天皇の時代にはアメノサグメが神璽の玉を盗んで天に昇ったが、これは天竺の仏生国で発見された。

異常気象では孝元天皇三十九年六月の大雪があった。とりわけ世間を騒がせたのは天変地異、孝靈天皇の時代に突然、富士山が出現したことである（「孝靈五年 あれを見る あれを見る」〔川傍柳』第三篇〕）。

富士山は蓬莱であり不死薬が存した。始皇帝は不死薬を日本に求めた。孝靈天皇は始皇帝に三皇五帝の遺書を求め、それらとともに孔子の著のすべてを得た。そのあとに焚書坑儒があったので、中国の書物はかえって日本に残った。文化史的に重要な出来事である。

富士山と並び称された金峰山（『義楚六帖』巻二十一）は、綏靖天皇の時代に金山を求めて五台山を請来したところ、その丑寅の角が飛来し、金峰山と筑波山とに成った。金峰山には金があり、

その後に出現した富士山の洞窟にも金山がある。

綏靖天皇は、兄を射殺して帝位に即いたのだが、食人帝だったので、嘆き悲しんだ臣下は許って「某月某日に火の雨が降る」と諸国に触れた。火の雨を避けるために岩屋が作られた。諸国に塚が多く残るのはこのときの岩屋である。内裏でも岩屋を作り、脱出することができないようにして、公卿三人・殿上人二人・女房二人とともに天皇をその中へ籠らせた。あとはどうなったか不明である。

孝昭天皇の皇子は、十三歳のときに父天皇の仇討ちをおこなっている。孝昭天皇はどのような最期を遂げたのだろうか、どのような仇討ちだったのだろうか。

文学史的に重要なのは懿徳天皇である。懿徳天皇が出雲へ行幸されたときスサノヲノミコトと対面し、別れるときにスサノヲノミコトが詠んだ歌が「立ち帰る道は山路の遠くともたづねば問はん問ふと知るかも」。これが人王の世になって初めての三十一字の歌である。この歌よりのち十二代のあいだ三十一字の歌は絶え、仁徳天皇の時代の「難波津に…」で復活した。しかし、その後また二十三代のあいだ三十一字の歌は絶え、天智天皇の時代に「浅香山…」の歌が詠まれて復活した。

\*編集部注 索引各巻の以下の見出し語等を御覧下さい

- 第一巻 雨・天探女・天叢雲剣・安寧天皇・一由旬・糸・懿徳天皇・岩屋
- 第二巻 金・金峰山・葉・孔子・孝昭天皇・孝靈天皇
- 第三巻 五台山・始皇帝
- 第四巻 真好王・綏靖天皇・素戔嗚尊
- 第五巻 筑波山・天竺・天智天皇
- 第六巻 火・富士山・不死薬・仏生国・蓬莱
- 第七巻 三十一文字・八坂瓊曲玉・雪／「浅香山」・立ち帰る／「難波津に」

▽——の薬玉を、三日六府より奉るに花を盆に盛る(塵・八・五・564)▽南陽王、讒にあって殺さるるも、死後四百余日顔色変らず髪も髭も落ちざるは、——の生れなればなり(塵・八・三・586)▽夏中の獣虫の祟りを除かんとて、——魚獣の形を腰につけて食す(塵・九・六・619)▽——の宴集に来れる老人、腰に魚形をつけず、龍の形を切る時顔の色を變ずるにより、衆人捕え殺す(塵・九・六・619)▽牛頭天王眠りを好み一年のうち——のみ目覚め他は臥すという(塵・三・三・438)▽因地とは、日本にて——に戲闘諍する意なり(文明節用・伊・15)▽屈原、——の初午の日に、汨羅の水に入りて死せし故、楚の人、——を端午と言ふ(文明節用・多・331)▽——に楚の人、百草を採り、門戸の上に懸け毒気を払うと荆楚歳時記に見ゆ(文明節用・多・331)▽初めて——の遊をなせし時、たまたま端午に当たりし故、今もその名にて呼ぶ(文明節用・多・331)▽——の鶏鳴の時、艾を採りて灸に用れば験あるを、近代の人菖蒲とすと荆楚歳時記に見ゆ(文明節用・多・332)▽薬玉は、——、五色の綾にて作り、小児の衣の袖に懸けて悪鬼を祓う(文明節用・久・504)▽競馬は——の賀茂神社の祭礼にて、唐の競渡を擬すか(文明節用・計・590)▽小五月は——にて、近江国坂本の日吉神社にて祭礼あり(文明節用・古・654)▽左近の馬場の引折りの日は、——なり(藻塩・三・九・17)▽——、左近の真手結なり(藻塩・三・九・17)▽俊頼——の心を「長き根も」と詠む(藻塩・三・九・17)▽みちの国信夫郡には、今年の菰を刈りて仮屋を作りて葺き始め、後菰を刈る、これは——の葉にあらず(藻塩・三・九・17)▽薬狩とは、——の狩を言う(藻塩・六・九・279)▽五月の鏡とは、——午の時に静かなる江南の舟中にて鏡たりし百練鏡なり(藻塩・七・三・301)五月会(藻塩)▽諏訪明神の——は光孝天皇の時より始まる(神道・四・一・97)▽満清の立願にて、諏訪の——は始まる(神道・四・一・103)五月七日(藻塩)▽赤磨、寺物を盗用して天平勝宝元年

十二月十九日に死し、翌年——に、背に碑文を負いたる牛として生まる(靈異・中・九)今昔・三・四(83)五月二十八日(藻塩)▽曾我兄弟の夜討は——の夜なり(曾我・九・357)五月の節(藻塩)▽五月五日(藻塩)五月二日(藻塩)▽狩の使は必ず四月中に下りて狩をするものなれど、業平は勅使定まらざる時にわかに下命せしにより——に出発す(伊勢冷泉・秋・六・363)五月三日(藻塩)▽——は左近の荒手結、四日は右近の荒手結、五日は左近の真手結、六日は右近の真手結なり(袖中・一・13)▽教長、——四日の左近右近の荒手結の日は、近衛舍人、褐の尻を引き折りたれば「ひおりの日」というとす(古今顯昭・二・四六・247)▽右近馬場の——の祭を荒手組み、四日をまつが、五日を、弓衆が褐衣の尻を引き折りて腰に挿むにより、ひおりの日という(知頭書・四九・八・182)(知頭島下・九・281)▽近衛の騎射、——は左近、四日は右近の荒手結、五日は左近、六日は右近の真手結なり(謡抄・右近・630)▽——、左近の荒手結なり(藻塩・三・九・17)五月六日(藻塩)▽右近の馬場にて——に弓おこないける時、業平、女に「みずもあらず」の歌をよみ、女「しるしらず」の歌を返す(今昔・三・四・四三三)▽五月三日は左近の荒手結、四日は右近の荒手結、五日は左近の真手結、——は右近の真手結なり(袖中・一・13)▽左近の馬場のひおりの日、五月五日右近のは——なり(袖中・一・13)▽「ひおりの日」は五月五日、左近右近の真手結に褐の尻を引き折りたれば「引き折りの日」の意なりと下野武忠又奥義抄(古今顯昭・二・四六・247)▽狩の使にて伊勢に下りし業平、祭の翌日の——に大淀まで帰り、斎宮なりし恬子内親王の使の杉子に「みるめかる」の歌を贈る(伊勢冷泉・秋・七・365)▽近衛の騎射、五月三日は左近、四日は右近の荒手結、五日は左近、——は右近の真手結なり(謡抄・右近・630)▽右近の馬場の引折りの日は——なり(藻塩・

三・九・17)▽右近の真手結なり(藻塩・三・九・17)五月八日(藻塩)▽開下帝釈 標知天皇命百年息(今昔・三・四・八)▽天平宝字元年八月、駿河国益頭郡の人、金刺舎人麻呂、蚕の産みて——の字を成すを獻る(統紀・天平宝字・元・八)▽孝謙天皇の群臣、蚕の——の字を議するに、天平勝宝九歳五月八日は、聖武太上天皇の周忌にて設斎悔過の終りの日なりと奏す(統紀・天平宝字・元・八)▽天平勝宝九歳八月十八日、「天下大平」並びに——の瑞字によりて、天平宝字元年と改元す(統紀・天平宝字・元・八)五月四日(藻塩)▽ひおりの日は、右近馬場の荒手結の日を言う(綺語・上・39)▽五月三日は左近の荒手結、——は右近の荒手結、五日は左近の真手結、六日は右近の真手結なり(袖中・一・13)▽藤原仲実の綺語抄に、ひおりの日は、右近馬場の荒手結の日を言う(袖中・一・14)▽教長、五月三日——の左近右近の荒手結の日は、近衛舍人、褐の尻を引き折りたれば「ひおりの日」というとす(古今顯昭・二・四六・247)▽為仲、陸奥国守となりて——に菖蒲を葺かするに、庁官の実方の時より菰を葺くと言ふ(今鏡・二・522)▽右近馬場の五月三日の祭を荒手組み、——をまつが、五日を、弓衆が褐衣の尻を引き折りて腰に挿むにより、ひおりの日という(知頭書・四九・八・180)(知頭島下・九・281)▽業平、狩の使として下向せし時、にわか下りしにより、——に二分の行事を重ねて行う(伊勢冷泉・秋・六・363)▽業平は五月三日に伊勢国に着きしにより、伊勢物語に「二日」という日とあるは——のことなり(伊勢冷泉・秋・六・363)▽——は伊勢神宮の外宮の祭なり(伊勢冷泉・秋・六・363)▽——に狩の使と斎宮が外宮へ行く道には荒薦を敷きたり(伊勢冷泉・秋・六・365)▽斎宮、——に宮河の北の里宮にて休息し、宮河に浮橋を渡して外宮に行く(伊勢冷泉・秋・六・365)▽近衛の騎射、五月三日は左近、——は右近の荒手結、五日は左近、六日は右近の真手結なり(謡抄・右近・630)▽一説に、引折りの日は右近の馬場の荒手結の日にて、——をいう(藻塩・三・九・17)▽右近の



せし源運に歌を詠みて遣る(東斎草木・181)▽朝成、仁和寺の——に唄を勤めし淨藏の誤を言うも後に恥ず(拾往・中・321)

さくらががり▽古今集の素性法師、「春霞」歌の——も桜を狩るにて、「さと暗がる」の意にあらず(袖中・元・313)▽和泉式部・道命・実隆の歌に見ゆる——は「桜のもとへ」の意ならん、実隆の歌は「桜狩り」の意をも掛けたるか(袖中・元・313)▽「春霞」歌は——を「桜狩り」と誤りて心得、「花園山を朝たてば」と詠めるか(袖中・元・313)▽——につき、「さと暗がる」「少し暗がる」「桜のもとへ」の意なる「桜のがり」等さまざまの解あり(袖中・元・313)

▽万葉集長歌「こもりくの」歌の「左雲理」を——と訓む本もあり(袖中・元・313)▽「さくらががり」歌の良暹打聞に入れられたるにより、皆——を「桜狩り」の意と解す(袖中・元・314)▽——に二説あり、俊頼は雨のこととし、基俊は桜を刈ることとす(藻塩・二六・280)

桜狩り▽歌の——とは桜を求むる意にて、鹿狩り、鷹狩り等と同じことなり(奥義・中・273)▽「春霞」歌は「さくらががり」を——と誤りて心得、「花園山を朝たてば」と詠めるか(袖中・元・313)▽歌の——とは桜を求むる意にて、鹿狩り、鷹狩り等と同じことなり、と興義抄にあり(袖中・元・313)▽和泉式部の「咲きぬらん」歌・道命の「折しもあれ」歌・実隆の「この御幸」歌等の「さくらががり」は「桜のもとへ」の意ならん、実隆の歌は——の意をも掛けたるか(袖中・元・313)▽「春霞」歌の良暹打聞に入れられたるにより、皆「さくらががり」を——の意と解す(袖中・元・314)

さくらがり雨は降り来ぬ(さくらががり)歌の——と万葉集長歌「こもりくの」歌の「さくもりて雨は落ち来ぬ」は同じ意なり(袖中・元・313)

桜児▽昔、——という娘子、林中の樹に懸りて経死せるを、二人の壮士、血の涙を流して「春さらば」妹が名に「歌を詠む(万葉二六・三五六)▽二人の男より求婚されし——、林の木の前首吊りて

死せし後、二人の男、「春されば」妹が名に「の歌を詠む(紫明二〇・170)

桜鯛▽——・柳鯖という名あること、物にも書けり(詞花頭昭・三七・478)▽詞花集「春くれれば」歌の「名こそ惜しけれ」は、春浮き出る——に寄せて、桜花を惜しむ心を詠む(詞花頭昭・三七・478)▽——・柳鯖というもの、物にも書けり(五代頭昭・515)▽あちかがたの海に春は鯛という魚の浮き出で来るを——という(五代頭昭・515)

桜谷▽近江国▽七瀬祓、洛外には摂津国の難波・農太・河俣、山城国の大島・橘小島、近江国の——・辛崎にて行(藻塩・二四・235)

さくらだに▽祓詞に冥途を——と言う(八雲三・350)▽——とは祓の詞に冥途をいう(藻塩・七六・129)

桜田連▽己智と同じ先祖。諸齒王の後なり(姓氏・大和国諸蕃)

桜散る▽坂上定成の末葉なる坂上兼成はことさら——と詠歌す(後拾遺頭昭・三六・429)

より出でて、宴半ば、——、色を變じ、逆浪、桜の前を底に取り入る(三三・二二・246)▽桜の前を奪われし遠江国守、——の主を退治すべしとて薪を集め山辺の岩石を焼き、——に七日夜転入す(三三・二二・246)▽焼きし岩石を入れられし——の水、磨墨より黒く變じ、また藍をもむより青く變じ、後、血色となりて沸き上る(三三・二二・246)▽——の水變じて後、牝牛の如き大毒蛇、浮び出でて死にし大毒蛇、背に黒き鱗を連ね、頂きに白角を戴き、口は獅子より赤く、爪は猛虎より利し(三三・二二・246)▽遠江国守、桜の前を取らるるも、——の主を退治し、三年住むに国治まる、その後、——と呼ぶ(三三・二二・246)

▽快賢の弟子法然、遠江国に下向し、——辺に到るに、快賢、元の姿にて対面し、法然の所望に大蛇の形を現す(三三・二二・247)

桜大娘▽夢によりて、牛の前世に物部磨たりしを知りたる岡田村主石人、妹の——に問いて確めたり(靈異・中・三三)

桜の童子▽伊豆山神社の塔の本、——は本地地藏菩薩なり(真曾我・三上151)

桜野首▽武生宿禰と同じ先祖。阿浪古首の後なり(姓氏・左京諸蕃上)

桜の前▽——を奪われし遠江国守、桜の池の主を退治すべしとて、薪を集め山辺の岩石を焼き、桜の池に七日夜転入す(三三・二二・246)▽遠江国守、最愛の——を取らるるも、池の主を退治し、三年住むに国治まる、その後、桜の池と呼ぶ(三三・二二・246)

桜村▽紀伊国名草郡——の物部磨、三上村の葉王寺の薬料によりて造りたる酒を借用して死し、牛の身を受く(靈異・中・三三)今昔・三三・四八四)



軻・丹を殺す(唐鏡・三・57)▽阿房宮を作る(唐鏡・三・58)▽儒士四百六十余人を咸陽にて坑に入る(唐鏡・三・58)▽仏教を伝えし天竺の沙門、——に獄舎に入れらるるに、金剛丈六の人に助けける(唐鏡・三・59)▽趙高、李斯とはかりて——の死を隠し、扶蘇を殺せし後胡亥を即位せしむ(唐鏡・三・59)▽東南に天子の氣ありとのろう(唐鏡・三・64)▽天下を定めし後、藍田山の玉を刻みて璽を作る(唐鏡・五・122)▽三神山に使を遣し、不死薬を求めしむ(雑談・四・二・147)▽——の百鍊鏡は、才人を並べ孝経等を注す(神道・一・五・29)▽——・漢武、虎狼の心あるも、夫人のために朝政を忘る(神道・一・五・280)▽龍樹の入滅は——の三十五年なりという(真言・一・15)▽孝靈天皇八十年は——三十五年にあたるという(真言・一・15)▽戦国の七雄の内、秦強大となり、六国と戦い、併せ吞み、——あらわる(三国・三・七・下292)▽燕の太子丹の帰国を許さず、丹歎くに鳥の頭白くなり馬に角生い、帰国するを得たり(奥義・中・270)▽優勝、陛楯の者の雨に濡るるを憐れみ、利口をもせんとし、に訴う(奥義・下余・367)▽苑囿を大にせんとし、優勝に利口をもつて論さる(奥義・下余・367)▽海中に石橋を造るに、海神柱を建つ(童蒙・五・205)▽海神に逢わんとするに、海神、形醜きにより描くなかれと言ひ、侍臣の手を縛り海に三十里入りて会见す(童蒙・五・205)▽海神に逢ひし時、侍臣の約を破り足にて海神の姿を描きしにより怒りを受け、逃げ帰りし後、石橋崩る(童蒙・五・205)▽漢の高祖の咸陽宮にて見出せし鏡、人の体内を映し、病・邪心を知らしむるにより、——の用いしものと西京雜記にあり(童蒙・六・228)▽海中に石橋を造るに、海神柱を建つ(袖中・六・100)▽——より面会を求められし海神、姿醜きことを恥じ、形を写さざらんことを求む(袖中・六・100)▽海に入ること三十九里にして海神を見し時、約により供の者みな手を縛りて動かさず(袖中・六・100)▽——と会いし海神、供の者の足にて形を写せしを怒り、——を去らしめて作りし橋を崩す(袖中・六・100)▽会いし

海神の怒りにより追い返されし——、馬を速めてわずかに橋の崩るるを逃れ、岸に上る(袖中・六・100)▽三十里の石橋を作り、海を渡りて日の出入りを観んとす(袖中・六・100)▽載記に、——に鬼の与えし鏡、径三尺にて、五臟六腑を映し病のありかを示せしに、——崩後にたちまち失すとあり(袖中・六・287)▽燕の太子丹の帰国を許さず、丹歎くに鳥の頭白くなり馬に角生い、帰国するを得たり(和歌色葉・下・250)▽趙高、——崩御の後、扶蘇を殺し弟胡亥を二世皇帝とす(蒙求和歌・一・75)▽高祖、——の高祖に天子の氣を感じて憤るを恐れ、芒碭山に隠る(蒙求和歌・一・75)▽斉を討たん為連環を后に贈りて試みるに、后の打ち砕く由を聞きて攻めずなる(蒙求和歌・五・103)▽——の群臣に酒を賜う時に人々の寒雨に濡るることを、優勝批判す(蒙求和歌・四・146)▽海神と共に海中に石橋を造りて後、海底にて海神に会い、絵師に姿を描かせて海神の怒りを買う(詞林采葉・三・39)▽——の三宝は、渡角・烏羽玉・玉銚を用い(古今三流・上・237)▽——の將軍湛忠、計略を用いて烏帝の母方の四代の先祖なる耀鬼、龍宮城より玉を飾りたる銚を持ち出す、これ——の三宝の一つなる玉銚なり(古今三流・上・238)▽——の三宝の一つなる玉銚、さきを主に向けず、自ら動きて柄を主人に向く(古今三流・上・238)▽楚の武王に敗れ湖州に逃れし時、孫の酒公、——の落とせし玉銚の向きを見て——の居所を知りしより、道を「玉銚」と言う(古今三流・上・238)▽秦の——の暴悪なりしこと、史記にあり(古今弘安・三・六・364)▽秦武政用記の一巻に、——は渡角・烏羽玉・玉銚の三宝有りという(古今毘沙・二・四九・121)▽玉銚は、——の家に代々伝るものなり(古今毘沙・二・四九・122)▽始皇帝の大将安長、玉銚の向かう方へ行くに——に会えり(古今毘沙・二・四九・122)▽秦の——に、渡角・烏羽玉・玉銚の三つの宝あること、秦武政用記にあり(雑和・中・144)▽渡角とは、秦の——の外祖父忠宴公が海中にて切り取りし飛龍

の角なり(雑和・中・144)▽烏羽玉は、穆王のとき、堪忠が捕えし五尺の鳥の翅にありし黒き玉にて、秦の——に伝えらる(雑和・中・144)▽秦の——、兄と戦いて負け、行方知られざる時、安長、玉銚の柄の向く方に進み、南州にて——と会う(雑和・中・145)▽玉銚は、秦の——の母方四代の先祖の耀鬼が尤宮城より取出したる、玉にて飾りし銚にて、秦の——に伝わる(雑和・中・145)▽秦の——の玉銚、先を主に向けざる不思議あり(雑和・中・145)▽秦の——の方鏡、邪心あらば胆心動くを写すにより、——、常にこれにて宮女の胆を照すと西京雜記にあり(雑和・下・202)▽箏は、秦の——の時、將軍蒙恬の作り出せしものなり(朗詠永濟・上本・六・七・33)▽秦の——は箏を好みしともい(朗詠永濟・上本・六・四・41)▽秦の——、驪山に登り神女と遊ぶ時、神女の怒りて出せし唾のかかるも、後に神女温泉を出だし洗えばかさ治れりと初学記に見ゆ(朗詠永濟・上本・三・四・63)▽「遅々兮春日」の句の「温泉溢」は、秦の——と驪山の神女の話による(朗詠永濟・上本・三・四・63)▽秦句一千余里「句の漢家三十六宮」は、史記に、秦——の咸陽宮に三十六宮ありというより漢皇宮三十六あるを言う(朗詠永濟・上本・五・六・80)▽秦の——、函谷と二嶂を関とすと文選注にあり、函谷は東関、二嶂は西関なり(朗詠永濟・上本・六・三・97)▽漢の商山四皓、秦の——の時の乱れを避けて商洛山という山にこもりしにより、商山四皓という(朗詠永濟・下本・三・四・144)▽「漢帝龍顏」句、——の言により、漢の高祖芒碭山に隠るるに、上に五色の雲になびけば、呂后居処を知る、の故事による(朗詠永濟・下本・三・六・149)▽漢の高祖、都の東南に住むに、秦の——、東南に天子氣ある者あり、と言(朗詠永濟・下本・三・六・149)▽「幾行南去之雁」の句の「胡城」とは、胡の国の夷を防ぐ城にて、秦の——の時胡国との境に築きて防ぎしものなり(朗詠永濟・下本・三・三・157)▽「一声鳳管」の句の上句、秦の——、秦嶺に登りて秦の徳を頌じける時、簫など吹きたるを言うか(朗詠永濟・下本・三・六・179)



ゆ(文明節用・比・1028)▽嵯峨経に、南瞻部洲は——の碧清うつりてみどりなるという(藻塩・二・一)

須弥山為第一いだいせん▽須弥山は四宝所成の山なる故に諸山に勝れたるをいう(直談五末・六・348)

須弥山王の妻むつせ▽龍王に娘五人あり、大自在天の妻、陰大女即ち波利安女、——、琰羅王の妻と八歳龍女なり(神道・三・366)

須弥相しゆみさう▽葛木山の金剛童子の名は、鳴滝は禅前童子・二の宿は羅網童子、——仏・雲自在王仏の垂跡なり(諸山・下・二・135)▽大通仏の第十二王子——は、相好端正なること須弥の類なるゆえに

いうなり、須弥は四宝所成の山なり(直談五末・元附・320)▽大通仏の第十二王子を——というは、身の長大なること須弥の如きことなり(直談五末・六附・320)

須弥蔵経しゆみざうけい▽——に、難陀、波難陀龍王、一切の蛇龍の王なりとあり(塵・四・三・280)▽龍に五種あり、象龍・蛇龍・馬龍・魚龍・蝦蟇龍なりと

——にあり(塵・四・三・280)

須弥頂しゆみとう▽葛木山の金剛童子の名は、一乗山は経護童子、——仏の垂跡、大福山は福集童子、師子相仏の垂跡なり(諸山・下・二・135)▽大通仏の第二の王子を——というは、須弥山の余の山に勝る

如く、功德の一切に勝るゆえなり(直談五末・元・317)

須弥灯光しゆみとうかう▽阿闍世王受決経に、二錢にて油を求め、仏に灯を供養せし貧女、——如来とならん

ことの記朔を授かることを説く(三宝・下・二・五)▽仏、貧女の志深き功德により三十一劫の後仏となりて——如来たるべしという、貧女の一灯これ

なり(宝物・六・52)▽貧女成仏して——如来という(曾我・二・404)▽釈迦、貧女一灯の功德の故に三十一劫の後——如来となるべしと告ぐ(璣・二・二・415)

須弥の頂を見るときいへども、欲の山の頂を見ることが得じゆみのいただきしむるべしとあることなり(直談五末・六・348)

となり、なお隠し蔵せる錢を守りしは、——の言

に合致す(靈異・中・三)

殊妙しゆめう▽伴は塚の古文字にて、二万六千六百六十日と読み人の——の日数なりという(江談・水・二・219)▽全子、——を思う人は朔日に精進すべき

ことを語る(中外・下・三・345)▽忠実、——を思わば毎月朔日精進すべしとの雅信の説を後鳥羽院に申す(古事・二・六・上・130)▽性信、宿曜勘文に

十八とありしが、尊勝法を修するにより炎魔王宮に火つき八十となる(古事・三・五・上・261)▽常在御前の名は法花経二十八品に「——無量」とあるになぞらう(神道・二・七・43)▽須臾馳走は他人の——を奪いて行者に施す(神道・三・四・76)▽伝教大師、

薬師像を刻み、祈りて幼子の——を延ぶ(神道・三・五・79)▽毘沙門夜叉王に仕うれば、諸願成就、——無量、如意の財を得べし(神道・三・五・81)

▽毘沙門を見れば、俱尾羅財施・大智恵を得、——は俱胝蔵なり(神道・三・五・81)▽印土の梵士菩提の妙果を期し、薬師像に祈りて幼子の——を延ぶ(神道・三・五・135)▽人は、劫初には形端嚴にて光明を帶し、自在に空に登り——一千歳、身丈

は一千尺または二千尺なり(神道・三・三・136)▽波羅奈国の長者の子、——十六の定めなるを、十五の時、ある沙門、千手観音像の呪を一日一夜用いて閻羅王の報を得、寿命八十を得たり(真言・三・五・105)▽空につりたる灌頂の上に引ける繩は、一切

衆生の——なり(三国・三・三・上・179)▽率都婆造立の施主は二世の悉地疑なく、煩惱消滅し——を押し富貴を得、十方淨利に生じ大菩提を証す(三国・三・三・上・181)▽唐の張李返、二十七歳の時、相師

より——三十歳を過ぎずと言われ、適口に語るに、三蔵訳の薬師経を書写し受持せよと言ふ(三国・三・三・上・284)▽張李返、薬師経をわずかに一卷書

写し得し時、再び相師に會うに、にわかに入三十年の——を延び得たりと驚かる(三国・三・三・上・285)▽張李返の——三十年を延し得たりと聞き、薬師

経を書写する者多し(三国・三・三・上・285)▽初めて阿弥陀魚を食せし者、——終りて三月後、紫雲に

垂り光明を放ち端嚴美麗の姿にて、執師子国の西南海上の島の浜に至る(三国・六・三・上・341)▽地獄の衆生得脱せし時、琰魔王、招対は善根熟する上

しむべしというに、招対蘇る(三国・七・八・下・40)▽金光明最勝王経は、梵風を扇ぎ、——を増し、

法雨を降し、災患を濟う(三国・八・六・下・101)▽開元末年、人の声を聞き寿の長短を知る相者、資聖寺にて門外の声を聞き、今日限りの——とみる

(三国・九・三・下・158)▽相者、今日限りの——と聞きし児、翌日七十歳に延びしを問うに、寿命経を誦するを聞くという(三国・九・三・下・158)▽釈迦

勝鬘に授記し、普光如来となり、国土に悪趣老病衰惱なく、衆生は他化自在の天人に勝りて色力

——五欲を快樂せん、という(三国・一〇・二・下・166)▽温州の司馬長病を得、死して一日を経るに親族

ら、養師の力にて災孽を洗い——を増さんと帰依供養す(三国・一〇・二・下・186)▽温州の司馬に異光照

すを見、閻魔、親類の七仏の像を造り——を延すことを得たれば、人間に返すべし、という(三国・一〇・二・下・186)▽性信、十八の——を尊勝法を修し

て八十に延ぶ(東斎・仏法・213)▽世の始まりは、人の——八万歳なり(天鏡・六・278)▽釈迦、八正慈

悲の門より出て、八相成道の窓に入り、八十の——をたもち八万の法蔵をとく源平・一・九・476)▽劫初、三千世界の中央、一四天下の南辺は、皆

化生にして——長遠なり(八幡甲・上・170)▽外に怨家敵対の——を奪い、内に煩惱遺背を摧くを調

伏という(八幡甲・下・203)▽八幡、賊軍の——尽きざる者の命は奪わず(八幡甲・下・204)▽八幡、

迷惑無慙の賊軍の、必死の病に責められ——尽き善根の種なきを哀れみ、悪心を摧破し邪見を対治

す(八幡甲・下・204)▽世間の相伝には、金峯山には官位、熊野は福、高野山は——を賜う、と言う(寛鑿・440)▽王城の鬼門東北の方にて法華経を講じ、天子の——を祈れば、国家安全万民安楽なり(直談・二末・一〇・89)▽薄狗羅、伽梨勒丸を病僧に与えしゆえ、美人と生れ、——も長し(直談・二末・

# 採録作品一覽

## 書名(略号)

1 古事記(記)

2 常陸国風土記(常陸風)

3 出雲国風土記(出雲風)

4 播磨国風土記(播磨風)

5 豊後国風土記(豊後風)

6 肥前国風土記(肥前風)

7 風土記逸文(風逸)

8 日本書紀(書紀)

9 続日本紀(続紀)

10 日本後紀(後紀)

11 続日本後紀(続後紀)

12 日本文徳天皇実録(文徳実録)

13 日本三代実録(三代実録)

14 古語拾遺(古語)

15 高橋氏文(高橋氏文)

16 先代旧事本紀(旧事)

17 新撰姓氏録(姓氏)

18 日本靈異記(靈異)

19 日本感靈録(感靈)

20 三宝絵(三宝)

21 大日本法華経験記(法華)

22 江談抄(水言鈔)(江談・水)

23 江談抄(神田本)(江談・神)

24 江談抄(前田本)(江談・前)

25 江談抄(群書類従本)(江談・類)

26 百座法談聞書抄(百座)

27 注好選(注好)

28 今昔物語集(今昔)

29 古本説話集(古本)

30 打聞集(打聞)

31 中外抄(中外)

32 富家語(富家)

33 世継物語(世継)

34 宝物集(宝物)

35 長谷寺験記(長谷寺)

36 発心集(発心)

37 古事談(古事)

38 続古事談(続古)

39 宇治拾遺物語(宇治)

40 閑居友(閑居)

41 今物語(今物)

42 十訓抄(十訓)

43 古今著聞集(著聞)

44 私聚百因縁集(私聚)

45 五常内義抄(五常)

46 撰集抄(撰集)

47 沙石集(沙石)

48 唐鏡(唐鏡)

49 雑談集(雑談)

50 内外因縁集(内外)

51 神道集(神道)

52 真言伝(真言)

53 吉野拾遺(吉野)

54 三国伝記(三国)

55 雑々集(雑々)

56 東齋随筆(東齋)

57 万葉集(万葉)

58 和歌作式(喜撰)

59 和歌式(孫姫)

60 石見女式(石見女)

61 能因歌枕(広本・略本)(能因)

62 俊頼髓脳(俊頼)

63 難後拾遺抄(難後拾)

64 綺語抄(綺語)

65 奥義抄(奥義)

66 袋草紙(袋)

67 和歌童蒙抄(童蒙)

68 袖中抄(袖中)

69 顕昭古今集序注(古今序顕昭)

70 顕昭古今集注(古今顕昭)

71 顕昭拾遺抄注(拾遺顕昭)

72 顕昭後拾遺抄注(後拾遺顕昭)

73 顕昭詞華集注(詞花顕昭)

74 顕昭五代勅撰(五代顕昭)

75 顕昭散木集注(散木顕昭)

76 西行上人談抄(西談)

77 古来風体抄(再撰本)(風体)

78 和歌色葉(和歌色葉)

79 無名抄(無名抄)

80 八雲御抄(八雲)

81 蒙求和歌(蒙求和歌)

82 万葉集註釈(仙覚)(万葉仙覚)

83 詞林采葉抄(詞林采葉)



- 84 青葉丹花抄（青葉丹花）  
 85 古今和歌集序聞書三流抄（古今三流）  
 86 古今和歌集頓阿序注（古今頓阿）  
 87 弘安十年古今集歌注（古今弘安）  
 88 古今和歌集灌頂口伝（古今灌頂口伝）  
 89 玉伝深秘卷（玉伝）  
 90 毘沙門堂本古今集注（古今毘沙）  
 91 和歌口伝（和歌口伝）  
 92 野守鏡（野守）  
 93 歌苑連署事書（歌苑）  
 94 為兼卿和歌抄（為兼）  
 95 和歌庭訓（和歌庭訓）  
 96 延慶兩卿訴陳狀（延慶）  
 97 悅目抄（悅目）  
 98 和歌無底抄（無底）  
 99 桐火桶（桐火）  
 100 愚秘抄（愚秘）  
 101 三五記（三五）  
 102 愚見抄（愚見）  
 103 和歌口伝抄（口伝抄）  
 104 玉伝抄和歌最頂（玉伝最頂）  
 105 深秘九章（九章）  
 106 阿古根浦口伝（阿古根）  
 107 雜和集（雜和）  
 108 和漢朗詠集永濟注（朗詠永濟）  
 109 大和物語（大和）  
 110 大鏡（大鏡）  
 111 栄花物語（栄花）  
 112 唐物語（唐物）

- 113 今鏡（今鏡）  
 114 水鏡（水鏡）  
 115 和歌知頭集（書陵部本）（知頭書）  
 116 和歌知頭集（島原文庫本）（知頭島）  
 117 冷泉家流伊勢物語抄（伊勢冷泉）  
 118 紫明抄（紫明）  
 119 河海抄（河海）  
 120 平家物語（平家）  
 121 源平盛衰記（源平）  
 122 真名本會我物語（真會我）  
 123 太平記（太平）  
 124 増鏡（増鏡）  
 125 會我物語（會我）  
 126 藤氏家伝（藤氏家伝）  
 127 聖德太子伝曆（伝曆）  
 128 上宮聖德法王帝説（帝説）  
 129 日本往生極楽記（往生）  
 130 本朝神仙伝（神仙）  
 131 続本朝往生伝（続往）  
 132 拾遺往生伝（拾往）  
 133 後拾遺往生伝（後往）  
 134 三外往生伝（三往）  
 135 新修往生伝（新往）  
 136 高野山往生伝（高往）  
 137 念仏往生伝（念往）  
 138 倭姫命世記（倭姫）  
 139 住吉大社神代記（住吉）  
 140 元興寺伽藍縁起（元興寺）  
 141 信貴山縁起（信貴山）

- 142 当麻曼荼羅縁起（当麻）  
 143 粉河寺縁起（粉河）  
 144 本浄山羽賀寺縁起（羽賀）  
 145 朝熊山縁起（朝熊山）  
 146 諸山縁起（諸山）  
 147 北野天神縁起（北野）  
 148 八幡愚童訓（八幡甲）  
 149 八幡愚童記（八幡乙）  
 150 日光山縁起（日光）  
 151 白山之記（白山）  
 152 六郷開山仁聞大菩薩本紀（六郷）  
 153 覚鑿上人打聞集（覚鑿）  
 154 妻鏡（妻）  
 155 夢中問答（夢中）  
 156 法華経直談抄（直談）  
 157 教訓抄（教訓）  
 158 文机談（文机）  
 159 体源抄（体源）  
 160 謡抄（謡抄）  
 161 海道記（海道）  
 162 東関紀行（東関）  
 163 徒然草（徒然）  
 164 塵袋（塵）  
 165 壺囊抄（壺）  
 166 文明本節用集（文明節用）  
 167 藻塩草（藻塩）

# 日本説話索引 全七巻

◎第( )巻を申し込みます( )冊  
◎全七巻を申し込みます( )セット

ご住所 〒

お名前

TEL

# 日本説話索引 全七巻

説話と説話文学の会編 ◆ ISBN978-4-7924-1461-0 C3591 (第三巻)

第三回配本(第三巻)



いざ、説話の森に!

40万の説話の概要が《読める》索引、待望の刊行

清文堂

◎B5判・上製本・貼函入 総 954 ページ

定価 本体 **22,000**円+税

既刊 第一巻 あ〜かか 各定価 本体22,000円+税  
第二巻 かき〜こうひ  
第四巻以降順次刊行予定

## 【編集委員】

池田敬子	朝比奈英夫
出雲路修	柴田芳成
田村憲治	白井伊津子
芳賀紀雄	中嶋容子
森眞理子	橋本正俊
山本登朗	森田貴之

古代から中世の文学・歴史・仏教・辞書など167の文献から話を抽出、人・土地・書物・経文・詩歌・一般事項などの見出し語に40万項の要約文をも掲げ、「引く」索引であると同時に「読む」索引。

## 清文堂出版

〒542-0082 大阪市中央区島之内 2丁目8番5号

電話：06(6211)6265 FAX 06(6211)6492

ホームページ：http://www.seibundo-pb.co.jp

メール：seibundo@triton.ocn.ne.jp

お取り扱い

## 清文堂出版

〒542-0082  
大阪市中央区島之内  
2丁目8番5号  
電話 06(6211)6265  
FAX 06(6211)6492  
http://www.  
seibundo-pb.co.jp